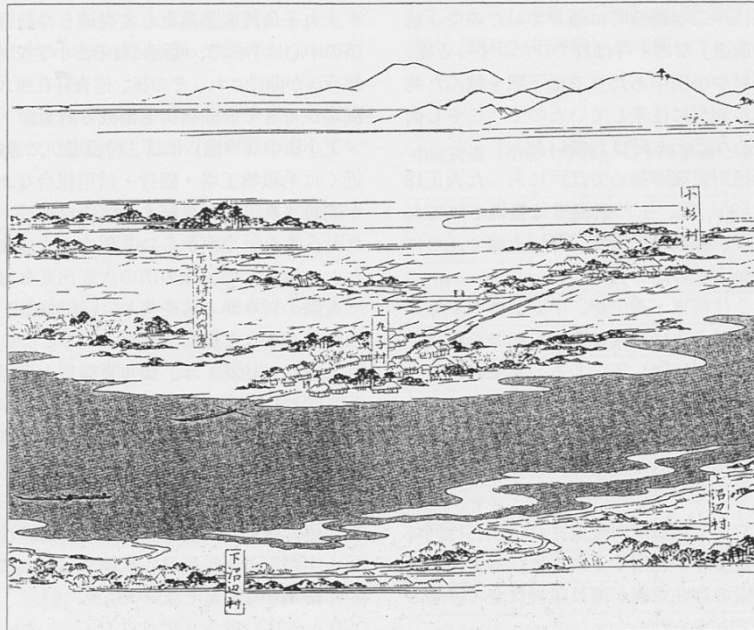


中原街道を歩く (多摩川から中原駅の歴史をたどる)



江戸時代の丸子の渡し (調布玉川絵図より)

中原街道は、武蔵国と相模国を結び中世以前からある道で、後北条氏の時代に本格的に整備をし、工事の際狼煙をあげ、それを目印に道を切り開いた関係で直線区間が多い。日蓮が利用したといわれ、徳川家康が江戸入りした(1590年)際も利用したといわれる。

江戸(虎の門)と平塚の中原御殿を結ぶのでこの名があるが、相模を通るので「相州街(海)道」、平塚で造られた酢が江戸城に献上されたので「御酢街道」とも呼ばれた。また、後になって小杉や小田中あたりを下肥を積んだ荷車が行き来したので「こやし街道」とも呼ばれていた。

今回は、多摩川の丸子の渡し跡を起点に西進し、武蔵中原駅まで歴史を辿りながらの散歩です。

【今回のルート】 (川崎歴史ガイドパネルに沿って散歩) 行程 約2.5km 所要 約2時間

新丸子駅 → 多摩川「丸子の渡し」跡 → 旧名主家と長屋門 → 明治の醤油づくり → 「カギ」の道 → 小杉御殿跡 → 西明寺 → 小杉駅と供養塔 → 庚申塔と大師道 → 小杉十字路 → ニヶ領用水 → 泉沢寺 → 木月堀とくらやみ → 武蔵中原駅



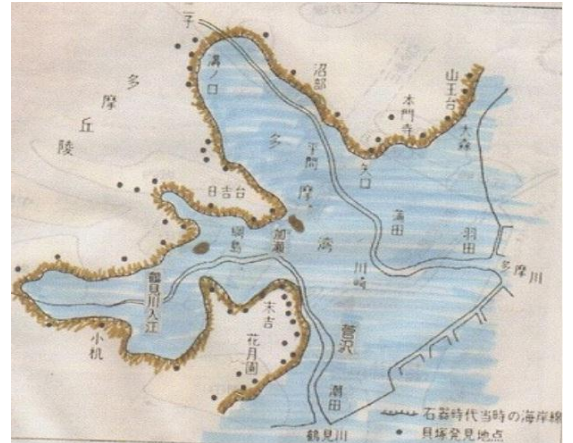
1. 多摩川と丸子の渡し

(1) 縄文時代～古墳時代の多摩川周辺の様子

今から 5000～6000 年前は、気温の上昇で海水面が上昇し、多摩川、鶴見川の中流域まで 5～10メートルの深さの海であった。当時の海岸線に貝塚が分布していることがこれを物語っている。

多摩川は溝の口あたりまでが海で、そのあたりに河口があった。(古墳図参照)

その後、徐々に縄文海進が後退し、上流から運ばれた砂礫や泥が堆積して平野を形成していき、古墳時代(約 1500 年前)には、ほぼ現在の海岸線に近いものとなったといわれている。



(2) 武蔵国橘樹郡と中原街道

奈良時代律令制のもとで川崎市域と横浜市の一部が橘樹郡となり、武蔵国の国府へつながる府中街道が設置され、足柄道(後の矢倉沢往還・大山道)が官道として利用されはじめた。この頃、中原街道が形成された。関東地方屈指の古刹、影向寺が7世紀後半に中原街道沿いに創建されている。(行基による)郡の行政を司る「郡家」と推定される建造物跡が影向寺台に発見されている。(平成 14 年)

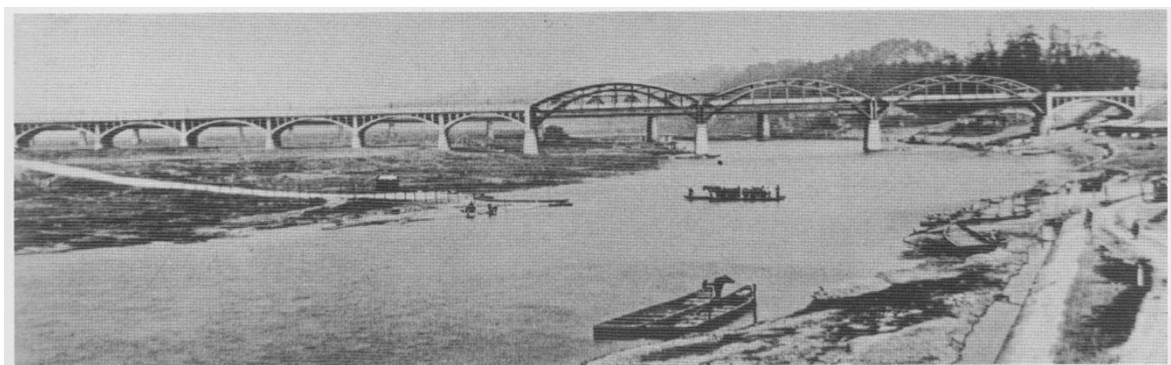


(3) 徳川家康の入府～江戸時代以降

徳川家康が初めて江戸に入った天正 18 (1590)年、まだ東海道は整備されておらず、入府に際してはこの道を利用した。

家康は武芸奨励と民情視察を兼ね鷹狩りを好んで行い、中原街道を良く利用した。陣屋や將軍、大名の宿に使われる御殿が建てられたり、旅人たちの宿ができ、小杉一帯は宿場町として繁栄したが、やがて東海道が整備されると役割が薄れ、脇往還となって以前の賑わいを失った。しかし、沿線の物資や農産物の輸送には欠かせない道として、以降も利用され続けた。(表紙「丸子の渡し図会」参照)

丸子の渡しは、中原街道の渡しとして明治・大正を経て昭和 10 年に丸子橋が完成するまで、往きは、野菜・果物・花ものを積み、帰りには下肥を積んだ手車や牛車が頻繁に利用していた。



丸子の渡しと完成した丸子橋 (昭和10年 5月) 東京側より上流のようす

(4) 時代とともに変化した多摩川の河原

丸子の渡し付近は、絶好の行楽地として川遊び、水浴びに興ずる人たちで賑わった。堤防から渡し場付近までの100mの松原通りには40軒ほどのお店があった。川魚の高級料理旅館から米屋、菓子屋、提灯屋、そば屋、床屋、風呂屋などがあり、商いをしながら桃作りや砂利取りをして生活していた。



昭和11年には、「多摩川スピードウェイ」というオートレース場が開設された。堤防斜面に当時の観客席の名残をとどめている。第二次大戦中は、畑地として開墾されたり、戦後は自動車の練習場として利用された時もあった。

2. 陣屋荘（原家）の表門

原家は約350年前から続く旧家で、天明4（1784）年に肥料（醤油かすなどの畑の肥料）を売る店を開店、戦後は、「陣屋荘」という割烹料亭を営む。社寺建築を思わせる二階建ての母屋は、重要歴史記念物に指定され現在、日本民家園（向ヶ丘遊園）に移築されている。



3. 旧名主家と長屋門

小杉陣屋町の安藤家は、戦国時代小田原の北条氏に仕えた安藤因幡守に繋がり、代々名主を務めていた。

入り口の長屋門は、江戸中期代官の娘が嫁入りした時に江戸の代官屋敷の裏門を運ばせて建てたものと言われる。長屋門の内側には、3枚の高札が掲げられている。大政奉還の翌年（慶応4年）のもので、国民に布告した「定」である。



4. 明治の醤油づくり（石橋醤油店）と八百八橋碑

創業は、明治3年で農業をしながら醤油造りをはじめた。大正12年から専業となり、「キッコー文山」の商標で販売され、昭和26年まで製造していた。現在でも醸造工場の一部が保存されている。中原街道沿いには、このほか木月掘の水を利用した朝山家の「朝陽」や小川家の「ふんどん東陽」など各所で製造されていた。

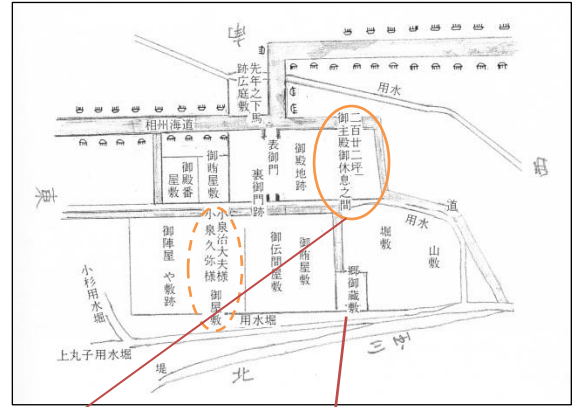
門柱の左に八百八橋の一部が保存展示されている。松原通りで干しか屋（イワシなどの小魚を干した肥料）を営んでいた野村文左衛門は、街道筋から海老名方面までの木橋や土橋を石橋に架け替え、販路の拡大をはかった。明和2年（1765）頃から寛政3年（1791）に没するまで八百八の橋を架けたと伝えられている。



5. 「かぎ」の道と小杉御殿

西明寺の門前で街道は、かぎ型に曲がる道となる。石橋醤油店から西明寺の北側一帯までに江戸時代の初めから約50年ほど将軍や大名たちが宿舎に使う「小杉御殿」があった。慶長13(1608)年に建てられ、寛永17(1640)年に建て直されて約1万2000坪という広大な敷地を占めるようになった。徳川実記によると家康、秀忠、家光、家綱などが鷹狩のあとここで休息している。城下町でよく見られる「かぎ」の道は、防衛上の役目をしており、背後の多摩川と西明寺や泉沢寺などが御殿の守りとなっていた。

お屋敷図中の点線に「小泉治太夫様」とあるのは、ニヶ領用水路を開削した代官で、陣屋が置かれたところである。



6. 御主殿跡（右上図の楕円実線箇所）

東海道が整備されると、御殿としての役割が薄れ、明暦元(1655)年に建物は品川の東海寺に、残りは後に上野の弘文院へ移築され姿が無くなった。小杉御殿がなくなったあと、それぞれの屋敷跡地に御主殿稲荷、陣屋稲荷、御蔵稲荷が建てられ現在に至っている。

御蔵稲荷の石段の一つは、「野村文左衛門」の銘が刻まれた八百八橋のものが使われている。



7. 西明寺と小杉学舎

龍宿山西明寺は大日如来を祀る真言宗智山派の寺、境内の「鏡の池」の出世弁財天は、北条時頼にちなむ伝説がある。石碑の中に「国家安全」「天下泰平」と刻まれたものがある。米露の長崎渡来・通商要求があって、外国船打払い令が出るなど世の中に動揺が広まったことを物語っている。

明治6年に西明寺の本堂を借りて「小杉学舎」（後に小杉小学校）が誕生、明治34年参道わきに尋常中原小学校ができるまで使われていた。



8. 小杉駅と供養塔

小杉村が宿駅に指定されたのは、東海道川崎宿から50年遅れた寛文13(1673)年であった。しかし最も栄えたのは小杉御殿があった江戸時代初期の頃であり、すでに脇街道としての存在となっていた。

「かぎ」道を曲がったところに附木屋がありその横に附木屋の先祖が建てた供養塔がある。側面に「武州橋樹郡稲毛領小杉駅」、土台に「東江戸、西中原」の文字がかろうじて読み取れる。

(附木屋は、15代続いた旅館業から「付け木」を商う店に転業した屋号の名残)



9. 庚申塔と大師道

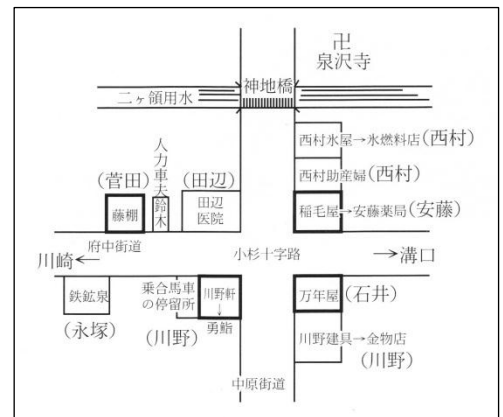
西に向かって少し進むと横道へ入る角に「庚申様」が祀られている。人の体内にいる小さな虫が、60日ごとに廻ってくる庚申の日に、天の神にその人の悪口を告げに行くと信じられていた。そこで人間の悪い所を見聞きしないように、見ざる、聞かざる、言わざるの三猿を彫って祀ったり、庚申の日には、虫が天に行かない様に、寝ずにお祭りをしたりした。ここの庚申塔にも三猿があって、百年以上たった今も付近に住む6軒の講が庚申の日ごとに集まっている。庚申塔には道標を兼ねたものが多く、左に続く道は大師へ向かう道を示しており、今でもこの道は大師道と呼ばれている。



10. 往時の小杉十字路

明治30年以降、府中街道と交差する小杉十字路には、料理屋、旅館、劇場、人力車屋、郵便局、医院などが集まり、土地の人が「ロンドン、パリ」と呼ぶような賑わいを呈していた。大正2年からは府中街道に乘合馬車が運行され、溝の口、川崎間を行き来した。大正7年には、乗合自動車に代わって行った。

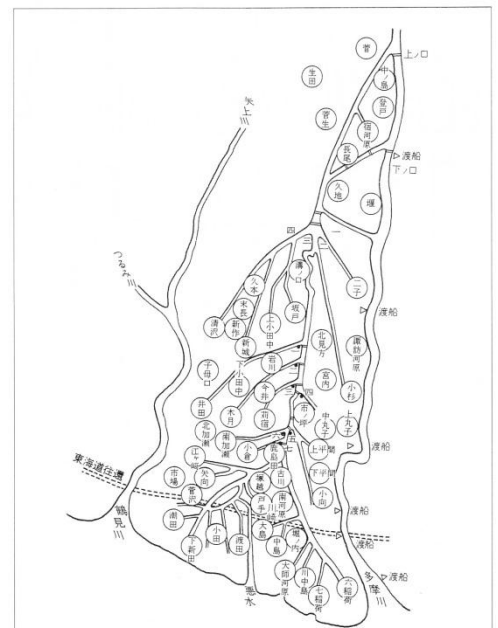
馬車は定員8人、1日上り下り各5便あり、川崎まで30~40分で、当時としては一番速い乗り物だった。



11. 二ヶ領用水と^{こうじいし}神地橋

多摩川沿いの村々は、川の近くに有りながら草原、荒地、砂礫のため米の生産には向いていなかった。家康に用水工事による新田開発の必要性を進言した代官小泉次太夫に工事が任され、慶長2(1597)年右岸の稲毛・川崎(二か領用水)と左岸の世田谷・六郷(六郷用水)の4ヶ領に及び工事が始まった。14年に渡る難工事の未完成し、米の収穫量の飛躍的向上に貢献した。また、昭和初期までは、飲料水にも利用されていた。

二か領用水は中野島と宿河原の二か所から取水し、全長32Kmにおよび、本流の川崎掘から数多くの細かい堀が分かれていた。この本流と中原街道と交差するところに神地橋がある。最初は木橋であったが、昭和12年にコンクリートに作り替えられた。



稲毛川崎二ヶ領用水路全図(稲毛川崎二ヶ領用水事績より)

12. 泉沢寺と門前市

寶林山泉沢寺(浄土宗)は、吉良氏の菩提寺として世田谷の烏山にあったものが焼失したため、天文19(1550)年この地に再建されたもの。当時、吉良氏は後北条氏のもとで全盛時代にあり、勢力は世田谷から川崎中部、横浜蒔田(現在の南区蒔田町)方面一帯に及んでいた。「市」によって寺と土地の繁栄を図るため、この地に住むものや、市を作り商売するものの税金を免除する古文書(川崎市重文)が所蔵されている。二つの市は「夏の泉沢寺お施餓鬼と冬の世



田谷ボロ市」として名残を留めている。

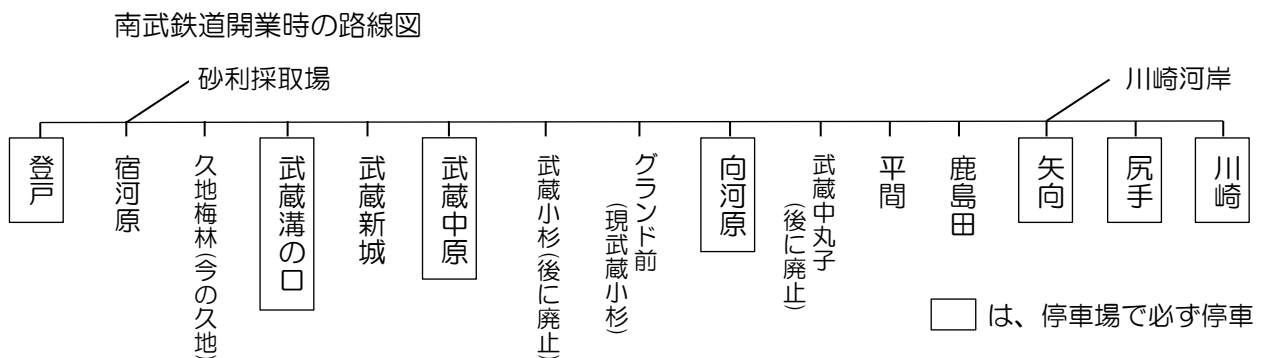
13. 木月堀と「くらやみ」

二か領用水の支流に、上小田中から分かれる井田堀、宮内からの木月堀、市ノ坪からの上平間堀などがある。

今は暗渠となって、水の流れをみることはできないが、木月堀の水は支流の中でも特に澄んでいたため、この水を使って醤油の醸造が行われていた。(4の項参照) 木月堀に沿って右に折れると道がくねった細い路地の右側に、江戸時代にこの地域の名主を務めた原家総本家がある。広い土地を持ち、家の周りが森の様に大きな木々に囲まれ、暗闇のようだったことから、「くらやみ」という屋号が生まれたようである。



14. 南武線の歴史



南武線は昭和2年に川崎—登戸間が開通した。当時は私鉄で一般旅客・貨物輸送のほか、多摩川で採集された砂利や砂を鉄道を経営する社長の会社（浅野セメント）へ運搬するためでもあった。

最初の路線計画では、先に開通していた東横線（大正15年 丸子多摩川駅—神奈川駅、昭和2年渋谷駅—丸子多摩川駅）の新丸子駅付近で交差し中原街道に沿って武蔵中原駅に向かうはずであったが、小杉の住民の反対（電車に対する誤認識で煙による火災の心配、線路による水害の心配）にあい、当時田んぼの真ん中だった現在のルートになった。旧武蔵小杉駅は、府中街道と交わる踏切付近で、現在の駅の場所は、グランド前駅であった。鹿島田、平間、武蔵新城、宿河原は停留所と呼ばれ、乗客がいなければ通過していた。

単線だったので、停留所で待つ乗客は、乗りたい方面の電車が来ると手を挙げて運転士に合図をしたり、遠くから走ってくるのが見えると運転士が待ってくれたというのどかなものであった。

昭和4年には、立川まで延び、五日市線と連絡し、奥多摩の石灰石を運ぶようになった。

昭和11年に、向河原駅前に日本電気、昭和13年に武蔵中原駅前に富士通信機製造（後の富士通）などが進出し、沿線工業化のキッカケを作った。昭和19年に国有化され国鉄南武線となった。

武蔵中原、武蔵新城の2駅が橋上駅となったのは平成2年で、以降、中原街道の大渋滞が解消された。

南武線グランド前駅（今の武蔵小杉駅 昭和初期）

